

ラポール維持管理のストラテジー

——交渉場面における「格下げ表現」——

神田 靖子

要旨

Helen S. Oatey (2000) の提唱する「ラポール維持管理のストラテジー」は、ラポール（親愛感情）を維持することがポライトネスであるとして、5つの「ポライトネスの領域」によってラポール維持管理がなされるという。そこに挙げられているストラテジーの一つとして「格下げ表現 downgraders（緩衝表現とも言う）」がある。このストラテジーが言語普遍的なものであるなら日本語にも適用されるはずである。そこで本稿は「格下げ表現」の7つの項目について日本語の実際例を検討し、「格下げ表現」の認定とその理由を考察した。結果として7つのうち「ポライトネス表示」はポライトネスの定義による相対的なものであること、「おだて」はより広義に捉えるべきであるということ、「控えめ表現」と「緩衝表現」のいずれにもまたがるような日本語表現があるということなどが知見された。

1. 「格下げ表現downgraders」と先行研究

「ラポール維持管理のストラテジー」とは Helen S. Oatey (2000) (以下 Oatey (2000) と略) の提唱するポライトネス理論におけるストラテジーの一つである。この理論によれば、ラポール (親愛感情) を維持することがポライトネスであるとし、5つの「ポライトネスの領域」(注1) が相互に関連しあつてラポール維持管理のために重要な役割を果たしているとする。「格下げ表現」はその中の「発話内行為の領域」に属するもので、「緩衝表現」とも呼ばれ、聞き手との間に良好な対人関係を形成するためのストラテジーとされている。初めにその定義をみよう。Oatey (2000) によれば、例えば「謝罪」や「感謝」といった発話行為の場合、「本当にありがとう」「大変申しわけありません」のように強意副詞を用いることによって「謝罪」の発話行為と結びついている肯定的効果が高められる。こうした表現を「格上げ表現 upgraders (増幅表現・強意表現ともいう)」というのに対し、「格下げ表現 downgraders (緩衝表現・緩和表現ともいう)」とは、「発話行為の効力を縮小もしくは弱める表現」を言う。例えば、「依頼」や「依頼の拒否」といった発話行為は相手の時間や労力を費やさせたり、不快な思いをさせたりといった、相手の負担を要請するような発話行為であるが、そのような行為において不快感や負担を軽減するために「あのう, すみませんが」あるいは「ちょっと～できないのですが」のような「あのう」「ちょっと」といった表現が用いられる。このように発話行為に結びつく否定的な効果を弱める働きをし、緊張緩和的効果をもたらす表現を「格下げ表現」と呼ぶのである。

上述のような緊張緩和的効果を持つものは先行研究では「hedge 垣根表現 (Lakoff 1972, 1986)」「euphemism 婉曲表現 (Leech 1983)」(注2)「approximator 近似表現 (Prince, Bosk and Frader 1982)」「mitigation 緩和表現 (Coates 1983)」「hedge 緩衝表現 (Chafe 2000)」「表現を和らげる効果をもつ語 (泉子・K・メイナード 1993)」等という名で呼ばれ、英語では kind of, sort of, somehow, rather, possibly, perhaps, generally, I think, I guess, you know, OK, tag question, 文末の though などが例として挙げられている。日本語については泉子・K・メイナード (1997, 2001) が「ぼかし表現」という名で「情報それ自体はあくまでも曖昧ではなく明確なも

のであるが、話し手が明言することを避ける場合に用いられ、情報をぼかしてやんわりと提示する方法」と定義して「それほど親密ではない相手に個人的なことを話したり、また相手をむやみに驚かせたくないとき」使われるもので代表的なものとして「なんか…らしい、とか、(お茶)でも(いかが)、(事務所のほう)(へうかがいます)」(泉子・K・メイナード 1997)が挙げられている。その他同義で、「この3時間はなんだったのみたいな。」における「みたい」の用法(藤井 2000)、「うどんにマヨネーズ——かけたりして。」の「たりして」という表現(森山 1997)についての研究もある。このように先行研究の多くには例が挙がっているが、どのような場合に「緩衝効果」を持つかというメカニズムは明瞭に定義されていなかった。しかし本稿の扱う H. S. Oatey (2000) は、このような緩衝表現をポライトネスが必要な場面におけるネガティブ・ポライトネスの表示と定義した上で、Blum-Kulka et al. (1989) に基づいて「統語的な格下げ表現」と「語彙または句的な格下げ表現」の2つに分類している。しかし、実際に用いられる「格下げ表現」の範囲と具体的な形態は言語によって異なると述べている。そこで本稿はこの分類に従って「格下げ表現」が日本語に適用されるか、また「格下げ」の効果がどのようにもたらされるのかを日本語の話し言葉コーパスに具体例をとって探らうとするものである。

2. 「格下げ表現」の種類と日本語への適用

まず Oatey (2000) の「格下げ表現」のそれぞれが持つ機能を見てみよう。

2. 1. 「統語的な格下げ表現」

これには①「予備的条件の否定」②「相(アスペクト)」③「時制」が挙げられている。①とは英語の例に You couldn't tidy up your desk, could you? が挙げられているように、ある発話行為をする予備条件が聞き手側にないと想定した発話の方が聞き手にとって負担が少ないゆえにポライトになるとする発想である。②は英語では例えば“I am wondering if ~.”という進行形、③は“I was wondering ~.”という過去形を用いるほうがポライトになることを指す。

2. 2. 「語彙または句的な格下げ表現」

この表現については、以下の項目が挙げられている。「依頼」という発話行為では相手の地位や親疎にかかわらず最も広く用いられる表現である“Can you ~?” (注3) に以下のような「格下げ表現」を付加することができるという。

(() 内は筆者訳)

発話行為 Can you tidy up your desk? (机を片付けてくれる?)

①ポライトネス標識 (Politeness marker)

Can you tidy up your desk? Please.

(どうか机を片付けてください。)

②控えめ表現 (Understater) Can you tidy up your desk a bit?

(ちょっと机を片付けてくれますか。)

③緩衝表現 (Hedge)

Can you sort of tidy up your desk?

(机を片付けてくれたりできますか。)

④主観化 (Subjectivizer)

I wonder if you could tidy up your desk?

(机を片付けてくれるかしら)

⑤緩和表現 (Downtoners)

Could you possibly tidy up your desk?

(ひょっとして机を片付けてくれるかしら?)

⑥おだて (Cajoler)

You know, you really need to tidy up...

(本当に机を片付ける必要あるよね。)

⑦懇願 (Appealer)

Tidy up your desk, will you?

(机を片付けて、頼むよ。)

この「格下げ表現」とされるものを見ていくと、それぞれがどのようなメカニズムで発話行為を格下げするかに違いがあることがわかる。①の「ポライトネス標識」とは発話行為を明確にし丁寧さを加えるポライトネス表現である。②「控えめ表現」は発話内の語や発話自体の持つ否定的意味を軽減するための表現であり、③「緩衝表現」とは語や発話の指示する意味を特定せず漠然とぼかして示すものである。④の「主観化」とは聞き手の遂行すべき行為について直接の言及を避け、話し手の主観を通した表現に変えて表現するものである。⑤の「緩和表現」とは陳述や依頼といった発話行為の力を緩和するものである。⑥は聞き手が発話内容を既に知っている想定することによって相手の面子を

立てるストラテジーである。⑦は命令から懇願へと変化する明示的な指標を指す。

このように先行研究では②③⑤はほぼ同義として扱われていたが、Helen S. Oatey (2000) はより詳しい分類を見せている。しかし、これらの日本語への適用を考える時、発話中の語彙や文に表れる (1) 発話命題内部の要素にかかるもの、および (2) 発話・伝達モダリティによるものの2種を区別しなければならない。とりわけ後者は英語のモダリティ分類には見出しにくい日本語の特徴とされるものであり (注4)、終助詞や終助詞相当の文末辞などがその表現を担っている。それ以外に間投詞、言いさし、フィラーなどといった語彙項目には入らない言語現象もここでは見逃せない重要な要素であるため、本稿ではこれらも「格下げ表現」に含めることにする。

3. データ

話し言葉コーパスとして、現代日本語研究会編『女性の言葉 職場編』(1997) を使用した。これは19人の「協力者」が携行した隠し録音機によって、「自然会話」を録音・文字起こししたデータである。その中から以下の条件に合致する場面 (注5) を選択した。

①「会議 (打ち合わせを含む)」場面。②対話者が目下 (学生など) ではなく、同僚であっても公的会議といった「改まり」度を必要とする状況。③協力者が対話相手を自己意見に同意させることをゴールとしその過程になんらかの「依頼」が入っている。

その理由は、交渉場面においては対人関係を傷つけることなく、相手 (対話相手あるいは他の対話参与者) を最終的には同意させるために、交渉を円滑に進行させる「格下げ表現」が頻出するだろうとの仮説からである。実際の発話にはオーバーラップ *overlap* やあいづち、音声情報も入っているが、分析対象となる発話のみをフィラーを含めて転記する。例文冒頭の数字は発話の通し番号である。

4. データに見る日本語の「格下げ表現」

この節では上記データから「格下げ表現」の代表的な具体例をひろい、そ

れらがどのような格下げ効果を生み出しているかを見ていくことにする。

4. 1. 「統語的な格下げ表現」

2.1. に述べたように「予備的条件の否定」については日本語では「～しないでしょね」といった表現が該当する。時制に関しては「どちら様でしたか。」という例は、相手の情報について現時点では失念してはいるが、過去に聞いたことがあり相手の存在自体は記憶に残っているということを意味し、相手について話し手は関心を持っていたことを伝える表現となり「格下げ表現」に該当する。アスペクトでは「またのご来場をお待ちします」より「お待ちしております」のほうが丁寧さが加わる。その他、「用意しておく」などの「テオク」形などもあり、その行為や結果が継続している状態が聞き手にとって利益のあることであり、聞き手への配慮が持続していることを表すのでこれも該当するであろう。

50 01A ええ、そうですね、散々お世話になりましたんで、はい。えーと、それじゃあ、そのこともあのお頭に入れておきますので。

(筆者注 「いちお」は「一応」のこと)

4. 2. 「語彙または句的な格下げ表現」

(1) ポライトネス表現

これは発話行為を明確にし丁寧さを加えるものと解釈される。日本語でのポライトネス表現としては「尊敬語、謙譲語、丁寧語」の敬語があり、聞き手への敬意が発話行為をやわらげる働きをもつ。しかしながら、敬語使用は社交場面では「わきまえ」(注6)として当然のことであり、親しい間柄では敬語使用はかえって失礼に作用する。宇佐美(2000)の提案する“ディスコース・ポライトネス discourse politeness”，つまり状況に応じた相対的なポライトネス表示が必要であるが、ここでは「交渉場面」での例としての敬語をあげておく。

2820 06A [名字] から電話があつて、連絡をとりたがっていたと、ゆうこと、もしあのお見かけになりましたら、口頭でもちょっとゆつていただ

けると、電話をいただけるとありがたいのですが（後略）

(2) 控えめ表現

これは、例えば発話文中の語彙の持つ否定的な意味や、聞き手にとって負担となる行為を示す発話の力を軽減するものである。

ちょっと

717 03A それとあの、まあ、ちょっと、えー、どちらかとゆうととゆうよりも、ひじょうにビジュアルを重視したいので、このへんが、あの一、これ、ちょっと実はすごく色が出がよくなってですね。

これは出版社社員Aが印刷会社に注文をつけている場面である。この例において話し手が実際に言いたいことは、波線部の「ひじょうに（重視したい）／すごく（色が悪い）」という程度の高い願望や状態であり、「数量・程度の低さ」を表す「ちょっと」とは相反するものである。人は一般に仕事に対する苦情のような聞き手にとって不都合なことは言い出しにくいものである。そのような心理的な負担を軽くし聞き手にとっても耳当たりがよくなるように、このような否定的な言葉の響きを和らげるのがこの「控えめ表現」である。本来の実質的意味を失い、フィラー化への段階にあると言えよう。

かなり、あんまり

722 03A あの一、ものすごくうまくいってない号なんですけれども。色を、かなりきっちり、出していただきたいとゆうのがありまして…

この例では、先の例の続きの発話であり、話し手が色にこだわっているのが表明されている。したがって本来は「非常に」のようなより程度の高い副詞を使いたいところである。しかし相手への配慮から、比較的程度の低い副詞を使うことによって願望を控えめに表現している。

881 03D たとえば今回の、さほど気に入られてないとゆうことは、その、色校正の段階で、色校正の責了おしと、ホンチャンの刷りがだいたいぶかけ離れてるってゆうことですか。

これは同じ場面での印刷会社の営業マンの発話である。実は試し刷りの色合いが顧客である協力者Aには気に入らないものであり、「非常に色が悪い」という不満を述べている。顧客が「非常に」という程度の高い副詞を用いていた

のと逆に、この話し手は「さほど」「だいぶ」という程度の軽い副詞を用いている。つまり話し手は、強い不満を述べた相手の発話を繰り返すのは自分にとっても不都合であるばかりでなく、相手の発話行動のばつの悪さを再現することを避け、発言内容の否定的側面を直視することを回避したいとの意向からこのような「控えめ表現」を用いたのである。

控えめな気持ちを表すフィラー

談話の流れに区切りをつけたり、談話の流れをモニターするために用いられる標識を Schiffrin (1987) は *discourse marker* と名づけた。フィラーはその一つとして、相手に発話の機会を与えずターン交替を阻止し、話し手の発話権の保持を示す働きをするが「対人関係調整機能」(注7) も持ち、意味のある語彙に並ぶ重要な役目を果たしている。例えば「あの (一)」は話し手が聞き手に配慮するときに現れ、「話し手が聞き手を思いやって、その負担を和らげるために」用いるとされる。このように「あの (一)」は陳述や依頼の発話行為の前にくるとおずおずと控えめに述べるという発話態度の表れとなる。

1600 04B 実はあの一、お願いというのは、ですね、えーと、係りの者がどの程度お話したかわからないんですけど、実は今度こうゆう、あの一ですね。

Oatey (2000) ではフィラーはヘジテーション *hesitation* として「否定的項目」の一つに数えられている。雄弁に話すことが期待される場面ではフィラーは「自信のなさ、言語能力の欠如」を表すが、上例のような対人配慮が必要な場面では、「控えめ」という肯定的な印象形成に役立っている。

(3) 緩衝表現

「緩衝表現」とは指示される語句を特定化せずにはぼかして言うものである。例示の表現や概念化の操作によって漠然と同類のものに広げたり、あるいは実質的意味のない言葉の使用によって発話の意味自体をぼかしたりする表現であり次の2種が考えられる。

a. 曖昧な表現によるもの

具体的に対象となる語句を直接指示するのではなく、対象を一つの例として示すことによってその種全般のものへとすりかえる、あるいは既知の事柄でも

「らしい」という伝聞・推量の助動詞を用いることによって、よく知らないことのように言って焦点をぼかす表現である。聞き手を驚かせないようにとの配慮(注8)に加えて、話し手の心理的負担を回避するストラテジーでもある。これには先行研究に挙げられている例示の「とか」や「も」、指示代名詞の「あれ」なども含まれる。

～(という)ような・ように／～ってな／(という)ふうな・ふうに

657 03A えー、定期的に出そうとゆうふうに、えー、いちおう、あの、そう
ゆう気持ちでいるんですけども。

10254 17A まあ、業界の中でやっぱりうちとして、こう、一緒に盛り上げて
いかなくちやいけないとゆうふうに思いますので。

これらの例では「出そうと思います／いけないと思います」ではなく「というふうに」を使って例示を表す言葉を用いて、漠然とぼかしている。「と」で導かれる引用節は、「出したいな／行こうと思います」のように、願望や意向などのモダリティを含んだ直接話法をそのまま引用することができる。つまり引用節中の話し手の生の声をそのまま伝えることができるのであるが、そこに現れるモダリティ表現に富んだ話し手の感情が聞き手にとって負担が大きいと話し手が見た場合、あるいは話し手自身が感情を間接化したいという場合「というよう／ふう」を用いてやわらげることができる。

どうも

10253 17A どうもこう、勢いとしては、ちょっといま下がってる状況ですね。

「どうも」は「だろう／らしい」などの推量の助動詞と結びつく副詞である。しかしこの発話例では文末で呼応していない。つまり推量の意味の薄らいだ「どうも」をつけることによって陳述という発話行為が緩衝されており、発話内容に表されている事実を断定するにはやや気が引けるといった話し手の心的態度が表されている。

b. 概念化によるもの

こと／の

泉子・K・メイナード(1997)が、「「こと」はある出来事を自らの中で対象化、概念化して再構成した内容を表す」と述べているように「こと」や

「の」はそれにかかる修飾節の内容を概念化する働きがある。文を受ける場合は「ということ／の」という形になるが、「こと／の」でくるむと概念化されてそれを含む全体を指すようになり、実際例が一つの事例として客観化されるため、緩和の機能を持つようになる。

722 03A あの一、色を、かなりきっちり、出していただきたいとゆうのがありました。(03Dはい。) えー、ですから、普通の雑誌に比べて(後略)。

この例では話し手の願望「出していただきたい」という願望をそのまま表現することもできる。しかし話し手はそう言わずに「というの」でくるんで概念化し、「依頼」という相手への負担を強いる行為を軽減しようとしている。この願望は他人事のようにも聞こえるが、実際は話し手の印刷業者への依頼であり、相手であるDは後にこの依頼を受ける応答を返している。

717 03A こー、定期刊行物のわりにはシステマティックじゃなかったってこともあると思うんです。

これも過去の業者の非を述べているところである。直接「システマティックじゃなかったの」といわずに、「～ともある」という表現をすることによって一つの事例のように概念化し距離をおいた表現にしている。

～(という)形で／ところ／感じ

「形／ところ／感じ」といった言葉を用いて事象を概念化することもある。

785 03A そのへんのスケジュールが一番聞きたいところなんですが。

2539 05A 色校でも出てなかったんですね。(05D 色校でもでなかった。) でなかった。

05D と、じゃ、本来的にはもう一校見たいってゆう感じ。

05A ですけどね。でも、もう、時間的にも間に合わないし。

これらの例では「聞きたいです」「見たいですか」という自分や相手の願望を直接述べたり問うたりするのではなく、「ところ」「感じ」という一般的名詞を用いて焦点を広げることによってぼかし和らげている。

743 03E とりあえず写真のほうのあたりを決めていただければ、とりあえず文字の原稿だけいただいて、文字を先に進めてくってな形をてまえどもでは通常考えますけれども。

印刷業者がクライアントに対して今後のスケジュールを説明している場面で

ある。手順が「進めていこうと考えている」といったモダリティを用いた個別的事例としては示されずに「形」によって概念化され通常の手順であるとされ、一般化によって間接的な表現になっている。

(4) 主観化

「主観化」とは、相手への負担を強いる依頼のような「行為指示型行為」では聞き手への言及を省略し、話し手側の行為として言い換えるほうが、聞き手の負担が軽減されて和らげられるため「格下げ表現」となるわけである。日本語でも「ペンを貸してください」よりも「ペンをお借りできますか」という表現の方がよりポライトになる。しかしこの主観化をさらに拡大すると、聞き手の行為を話し手の主観を通して説明する「わけだ」のような「説明のモダリティ」も該当すると言えよう。

787 03 D いちお, あの一, あれですよ。 えーと, 校正それぞれ1回ってことは, えー, きちっと組まれたもので, ご覧になったほうが, あのいいわけですね。

これは営業マンがクライアントである協力者の要望に応じた答えである。相手は「きちっと組まれたものを見たい」という願望をもっており、それを確認する発話であるが「見たいですね」と願望を直接表現するのではなく、「～たほうがいい」という選択肢から選ぶ表現にした上に、「わけですね」という話し手自身の主観を通して説明するモダリティの表現を使って客観化している。聞き手の感情領域に立ち入ることを避けて話し手自身の責任にするという配慮が見られる表現である。

(5) 緩和表現

「緩和表現」とは発話に文末辞をつけたりして、陳述や依頼などといった発話行為の力を緩和するものである

のだ／じゃないか／と思う

「のだ」は「説明のモダリティ」を表す文末辞とされるが、現状を認識しその背後にある事情を推察した答えとして発せられるというプロセスを感じさせ(注9), 「～は～のだ」という基本的な構造から派生した「告白・打ち明け」

といった含意を持つ。そこから話し手が自己情報を伝える語りのような場面では述べ立てのモダリティを緩和する表現として機能する。

698 03A とにかくえー，〔社名〕さんが営業している年内中に納品できればいいんです。

同様に「じゃないか」「思う」も述べ立てのモダリティを緩和する働きがある。

10277 17A 略図をつくって，まあ，自分の，自宅から，あの一，通えるのかどうか，てゆうふうなところを，が，やっぱり大切なことだと思うので，それがぱっとわかるような，形のマップをつけたらいいんじゃないかなってゆうふうに思ってます。

(6) おだて

これは聞き手に発話内容に関する知識がすでにあるということを示すことによって、聞き手の面子を立て、協調の場を作ろうとする戦略である。例にも挙げられているが、Schiffrin (1989) が談話標識 *discourse marker* と名付けたものと重なり、聞き手と共通のコミュニケーション基盤に立って談話を進めようとする心的態度を表す標識、あるいは発話が含まれる。語句の字義通りの意味によるものと、語彙項目に入らないものがある。

a. 語句によるもの

10252 17A 皆さんもご存知のとおり，その一養成講座，まあ，なかなか成り立っていかない，その経営的に厳しい状況だとゆうこと一ですね。

話し手が今からなにかにについて話をするが、それを聞き手が既に知っていたとしたら改めて話すのは失礼に当たると思う話し手の謙虚な態度を示すものであり、またそうした非難から防御線を張る働きをするものでもある。

772 03A で，あの，色分解と，それから文字のほうを分けるのはわかるんですが，えーと，文字と版下の製作とを分かるとううことも必要ですか。

話し手に聞き手とは別の考えがある場合にも上の例のように一応の同意を示すという戦略もこのグループに入る。

b. 談話標識

談話標識には、話し手と聞き手とがコミュニケーション上の共通の基盤に立っていることを示すものがある。英語では *you know?* や *right?* がそうした機能を持つが、日本語に該当するものには終助詞や間投助詞などがある。一方的な語りを押し付けるのではなく聞き手存在を前提として談話を共同構築しようという意志が含意されるため、聞き手を配慮した「緩和表現」として機能していると考えられる。

①終助詞

これには次にあげる「ね」の他、「確認疑問」を表す「よね? だろう? じゃないか?」なども含まれる。

「ね」

1612 04B 遅くとも来年の6月ぐらいまでにはなんとか、まあ、まとめたい。

04A あ、そうか、3月末じゃなくていいわけね。

04B ええ、ええ。

上の例のように「ね」は聞き手にも情報があるという前提での「同意求め」が基本的な意味である。しかし次のような例もある。

677 03A それで、まあ、こちらでミリ、ミリ単位でまー計算しまして、いちおう出すんですが、この英語が全部揃ってくるまで、えーと、そちらにお渡しできないんですね。

この例では話し言葉の自己情報であり相手の知らないものであるため、情報は一方的なものである。しかし「ね」が使われるのは、コミュニケーション上は共通基盤があり聞き手と情報を分かち合っているという話し手の心的態度が表されるためである。このことは間投助詞にも該当することであり、上の例の「ね」と間投助詞との境界は微妙である。

②間投助詞

ね/ですね

これも話し手が談話中に、聞き手の反応を確かめるために同意を求めて、談話の流れをモニターする機能を持っており聞き手存在を常に念頭に置いている

ことが示されるものである。

2817 06A 今、ご自宅のほうにお電話をしたんですけれども、いらっしやらなかつたんですよ。それでちょっとですね、緊急にですね、ご連絡をとりたいことがございまして。

③言いさし

言いさしも聞き手との協調を示す重要なストラテジーである。これは発話を最後まで完結しないで途中でやめることを指し、連用中止形あるいは終助詞化した「けれども、けど、が、ので、から」で終る場合が多い。談話機能としては相手にターン交替の機会を与えるが、発話の完結を相手に委ねることにもなるため、談話を共同構築しようという意志が含意されるため、聞き手配慮の「緩和表現」としても機能する。しかし曖昧に文末をぼかす場合、(3)の緩衝表現に属するとも言え、どちらかは決定し難い。

669 03A それで、えーと、遅れるのはですね、ここですね、あの、ここは、全部、そろってからでないといきませんで。(Dええ)で、これの指定のしかた等々をちょっと加えいく、あとでえー打ち合わせさしていただきたいと。

1620 04B [名字] 先生は、あの精神科の先生。

04A はい、まあ、知ってる、よく知ってます。

04B あ、そうですか。あの地方の問題とかもあるだろうし。(04 A はい、はい)

(7) 懇願

初めの命令調から懇願へと変化する明示的な指標を指す。

3264 07A これからやってもらいたいいろんな連絡事項がまわるような形で、まず委員長さんを決めていただいて、ここに連絡網を作ってください。この作業をまずひとつ今日お願いしますね。

これは教師が学生に対して指示を与えている場面である。初めに作業方法を指示しているが、最後に「お願いします」という丁寧な依頼の遂行動詞を用いてはっきりと懇願している。依頼という聞き手に負担をかける行為指示の発話

行為が、へりくだった懇願の発話行為に変わることによって聞き手に受け入れられやすくなる。

5. まとめ

以上、「交渉」という場面における「格下げ表現」の実例のごく一部を拾ってみた。このように Oatey (2000) の挙げる7つの分類はそのメカニズムにおいて妥当性があり他の表現にも適用されると思われる。このように「格下げ表現」の類型は抽出できたが、以下の点が問題として残る。

①(1)「ポライトネス表示」という概念が相対的であるということ。Oatey (2000) の挙げる7つの分類のうち、(1)「ポライトネス表示」については、彼女自身「ラポール維持管理のストラテジー」のうちの「ポライトネスの領域」をさらに細分化した下位領域を挙げていることから、その表示も相対的なものであると言えよう。本稿では例として敬語を挙げたが、談話における敬語は宇佐美 (2000) の指摘するようにポライトネスの表示としては相対的なものである。さらに敬語の位置付けを再考する必要があるが本稿では述べることができなかった。

②(6) は「おだて」という名称であるが、先に述べたように聞き手と共通のコミュニケーション基盤に立って談話を進めようとする心的態度を表す談話標識などが含まれる。このことは「おだて」という日本語の持つニュアンスと異なり、より広い表現が含まれることになり本稿では広義に捉えた。

③「格下げ表現」として明確に判断できないものがある。とりわけ(2)控えめ表現や(3)緩衝表現の例として挙げた副詞の中には、控えめ表現の機能をもつフィラーの前後に出現するものがある。フィラーと結合することによってその機能強化に作用しているが、実質的意味は薄れており、明確に副詞としての「格下げ表現」と同定しがたくフィラー化の途上にあるように思える。

④(3)緩衝表現のうちの「概念化」の例として挙げた「形／ところ」などについても、概念化の機能を必要としない箇所を使用されることによって単なる「冗長表現」と見られる例もある。「冗長表現」が「格下げ表現」として機能するかについては再考を要するが本稿では扱えなかった。

最後に「格下げ表現」とはある発話状況によって定義されるものであること

が指摘される。例えば緩和表現と判断されたものは「主張」という発話行為においては自己主張を緩和し控えめな態度を表し、相手との歩み寄りを示す。しかし、「詫び」という発話行為において自分のした行動の叙述につけると、指示対象をぼかすことによって責任の回避となる。このように同一の表現も異なった機能を持つ。したがって「格下げ表現」に挙げられる表現そのものの機能は発話状況による相対的なものであると言えよう。今後もさらに考察を続けたい。

(注)

- (1) 5つの「ポライトネスの領域」とは「発話内行為の領域」「談話の領域」「参加・関与の領域」「文体論の領域」「非言語の領域」であり、「格下げ表現」は「発話内行為の領域」に属する。
- (2) Leech (1983) は「婉曲表現」について、「「婉曲表現」とは不愉快なトピックを外見上、あたりさわりのない表現を用いて指し示すことによりそれらの本性を隠すことができる。」と述べている。
- (3) 井手他 (1994) 「アメリカ人の敬語行動」にもこの形が最も一般的な依頼の表現であるとされている。
- (4) 仁田 (1989) の名づけによる日本語のモダリティの1種。「発話命題を相手に伝えるときの話し手の伝え方のモダリティ」を指す。言い切り、終助詞、複合文末辞などによって表される。
- (5) 7人分 総発話数1004
- (6) Ide, Sachiko “Formal forms and discernment: two neglected aspects of universals of linguistic politeness. *Multilingua* 8, 223-248 によれば、井出は Brown & Levinson (1987) のポライトネス理論は「個々人の自由を尊重する」言語圏では通用するものであり、日本語のような敬語体系のある言語文化においては「わきまえ」という要素が強いと反論している。
- (7) 山根 (2002) はフィラーの機能として「話し手の情報処理能力を表出する機能」「テキスト構成に関わる機能」「対人関係調整機能」を挙げている。
- (8) メイナード (1997) による。

(9) 田野村 (1990) のいう「背後の事情を表す」, 角田 (2004) の言う「認識→疑問→推察→答え」という思考プロセスなど。

(データ出典)

現代日本語研究会編(1997)『女性のことば・職場編』ひつじ書房

(参考文献)

- Blum-Kulka, Shoshana, Juliane House and Gabriele Kasper (1989) *Cross-Cultural Pragmatics: Requests and Apologies*. Ablex
- Brown, Penelope and Stephen Levinson (1987) *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge University Press
- Chafe, Wallace (2000) Epistemic Modality 「認識モダリティ周辺の日英対照例」 国立国語研究所第7回国際シンポジウム「認識のモダリティとその周辺」
- Coates, Jennifer (1983) *The Semantics of the Modal Auxiliaries*. Croom Helm
- Ide, Sachiko (1989) Formal forms and discernment: two neglected aspects of universals of linguistic politeness. *Multilingua* 8
- Lakoff, George (1972) *Hedges: A Study in Meaning Criteria and the Logic of Fuzzy Concepts*. Papers from the Eighth Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society 1972, 183-228. Reprinted in: *Journal of Philosophical Logic*. 1973, 2:4, 458-508
- Leech, Geoffrey (1971) *Meaning and the English Verbs*. John Benjamins 國廣哲彌訳「意味と英語動詞」大修館書店
- (1983) *Principles of Pragmatics*. Longman 池上嘉彦・河上誓作訳
- (1986)「語用論」紀伊国屋書店
- Maynard, Senko K. (1993) *Discourse Modality: Subjectivity, Emotion and Voice in the Japanese Language*. John Benjamins
- Oatey, Helen S. (2000) *Culturally Speaking: Managing Rapport through Talk across Cultures*. The Continuum Publishing Company

- 田中典子他訳『異文化理解の語用論：理論と実践』（2004） 研究社
- Schiffrin, Deborah (1989) *Approaches to Discourse*. Blackwell
- 井出祥子, 荻野綱男, 川崎晶子, 生田少子 (1986) 『日本人とアメリカ人の敬語行動 ——大学生の場合——』南雲堂
- 宇佐美まゆみ (2000) 「談話のポライトネス ——ポライトネスの談話理論構想——」第7回国立国語研究所国際シンポジウム『談話のポライトネス』
- 佐々木倫子 (2000) 「認識モダリティ周辺の日英対照例」国立国語研究所第7回国際シンポジウム「認識のモダリティとその周辺」
- 白川博之 (1996) 「「けど」で言い終わる文」『広島大学日本語教育学科紀要』第6号
- 田野村忠温 (1990) 『現代日本語の文法 I 「のだ」の意味と用法』和泉書院
- 角田三枝 (2004) 『日本語の節・文の接続とモダリティ』くろしお出版
- 仁田義雄 (1989) 『日本語のモダリティ』くろしお出版
- (2000) 「日本語の認識モダリティ」国立国語研究所第7回国際シンポジウム「認識のモダリティとその周辺」
- 野田春美 (1997) 『「の（だ）」の機能』くろしお出版
- 藤井聖子 (2000) 「認識的モダリティと“その周辺”との関連」国立国語研究所第7回国際シンポジウム「認識のモダリティとその周辺」
- 泉子・K・メイナード (1997) 『談話分析の可能性』くろしお出版
- (2000) 『情意の言語学』くろしお出版
- (2001) 『恋するふたりの「感情ことば」』くろしお出版
- 森山卓郎 (1997) 「うどんにマヨネーズかけたりして ——並立の意味」『月刊言語』2月号
- 山根智恵 (2002) 『日本語の談話におけるフィラー』くろしお出版